

こんな風につかっています
私の電子情報活用事例

vol.6

The Bible in English

—英語の歴史を映す貴重な資料—

社会学部教授 内田 充美

大学図書館ホームページトップページの「Web データベース」からアクセスして使用できる The Bible in English は、英語に翻訳された聖書を収めたデータベースです。10 世紀から 20 世紀に翻訳された英語訳の聖書を、インターネット経由で読むことができます。聖書が読める、と聞くと、神学分野での学びや研究、信仰に支えられた日々の暮らしにおける学びのツール、という印象をまず持たれるかもしれません。たしかに、そのような目的でこのデータベースを用いることも、もちろん可能です。手元にある日本語訳聖書の章や節番号を手がかりにして、それに対応する英語表現を読むと「英語ではこのように表現されているのか」「日本語で読んでいた時になんとなく腑に落ちなかったところがすっきりした」などという驚きに出会えることもあるでしょう。

このデータベースを提供している ProQuest 社による説明の中では、宗教学の研究者だけではなく、英文学の研究者と、英語の歴史を研究する人も、主な利用者として想定されていることが明記されていますⁱ。同じ内容の記録が、数世紀の間にいくつも英語に翻訳されてきているのですから、ことばの変化を検証するには格好の材料です。以下では、2 つの例を挙げて、言語学研究においてこのデータベースがどのように利用されるかを紹介します。

たとえば、英語の forbid (禁じる) という動詞は、昔は that 節をとっていたのですが、今日では that 節をとることはあまりありません。英語の歴史において、that 節がだんだん使われなくなっていくという大きな傾向の中、この動詞は God forbid の形(「～しませんように」という願望を表す)に限って、that 節を伴う形が存続してきました。この事実を時系列に沿っ

て検証するために The Bible in English のデータベースを使った研究がありますⁱⁱ。

また、英語の接続詞 because は比較的新しいもので、理由を表す for に代わって勢力を伸ばし続けてきました。その様子もこのデータベースで確認することができます。1970 年訳の *New English Bible* の「創世記」の中で接続詞 because を検索すると 53 例が見つかりますが、1611 年に翻訳が完了した『ジェームズ王聖書』(『欽定英語訳聖書』とも呼ばれます)ではそのうちの約半数で because が使われています。ちなみに 14 世紀末に英訳された『ウィクリフ派聖書』では同じ 53 箇所のうち because が用いられているのは 0 件で、40 件ほどで for が用いられています。これらの比較をすることによって、17 世紀初頭には、because の定着が、宗教という厳粛さの要求される、かなり保守的な言語使用の場において市民権を得るほどまでに進んでいたことがわかります。

The Bible in English には、さまざまな時代における 12 種類以上の旧約聖書・新約聖書が収められていますから、英訳された時期や背景を考慮に入れることによってさまざまな言語変化を追跡することが可能です。人とともに変化してきたことばの歴史を映して示してくれる貴重な資料を収録したデータベースであると言えます。

ⁱ http://www.proquest.com/products-services/bible_in_english.html [2016 年 12 月アクセス]

ⁱⁱ Iyeiri, Yoko (2003) "'God forbid!': A Historical Study of the Verb Forbid in Different Versions of the English Bible." *Journal of English Linguistics* 31: 149-162.

The Bible in English とは

The Bible in English は、英語に翻訳された聖書を、欽定訳聖書以前のものから現代の版まで網羅した画期的なデータベースです。個々の単語やフレーズ、時代や版による全テキストの検索が簡単に行えるほか、異なる版の同じ箇所を比較することができます。

